

## 意見のまとめ(たたき台)

## 地域のつながりを作る生涯学習の在り方について

はじめに

愛知県生涯学習審議会は、平成30年度から令和元年度にかけて、地域のつながりを作る生涯学習の在り方について審議を重ね、その意見をここに取りまとめた。

第2期愛知県生涯学習推進計画では、「自己を高め、地域とつながり、未来を築く生涯学習社会」を基本理念としており、その基本理念を実現するための三つの視点を設定しております。

一つ目は、「個人の自立を促し、学びを生かす機会の充実」とし、自己充足型生涯学習にとどまらずに、県民が学習活動を通して、個人や地域の課題解決を地域の一員として行っていくという「社会参画型生涯学習社会」へ導く仕組み作りの必要性を示しています。

二つ目は、「地域の絆(きずな)作り・ネットワーク作りの促進」とし、全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる「地域共生社会」の実現のために、あらゆる住民が地域とつながり、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを形成し、行政を始め、様々な主体と協働して助け合いながら暮らすことのできる仕組みを構築することの重要性を示しています。

三つ目は、「多様な主体による連携・協働の強化」とし、効果的な学習機会を提供し、県民の主体的な学びを育み、学びの成果が適切に評価され、地域活動につながる環境の整備を進めることにより、「『学び』と『活動』の循環」を形成していくことの重要性を示しています。

そして、三つの視点の柱である「社会参画型生涯学習社会」、「地域共生社会」、「『学び』と『活動』の循環」の実現のためには、地域における人、組織等の結びつきがあり、相互の信頼や協力の関係が築かれていて、地域ネットワークが形成される「地域のつながり」が生まれてくることが大切です。そこで、様々な学習活動において、人、活動、組織などを調整してそれぞれをつなげ、まとめることにより、新たなつながりを生み出すことのできる「つながりを創出する人」の存在が重要です。

そこで、今期(平成30年度、令和元年度)の協議の視点を、「地域のつながり」を生み出すために、「つながりを創出する人」は、どのような人材が望まれており、その人材を発掘・養成・育成していくためには、県や市町村としてどのような方策が考えられるか。また、市町村等が人材を活用し、人材が活躍するためには、県や市町村、多様な主体がどのようなネットワーク作りをしていくのがよいか審議いただきました。

## 視点1 望まれる人材

(どのような資質、能力、経験を備えた人材が望まれているか)

(行政職員は)

- ・ 市町村職員に求められるスキルとして、実際に動く人、実績や意欲がある人をいかに作るかである。そのためには、いろいろなところで情報収集をしていただくことが必要である。
- ・ 町に出ていき、自分と違う人生、仕事ぶり、暮らしぶり、あるいは困ったことは何かあるかを聴く。そういうことを積み重ねた人とは、本当に腹を割って、話し合うことができる。
- ・ 先進地の取組などを参考としながら、我が市の生涯学習・社会教育をどう進めようかという志を持つような人が出てくると更にパワーアップするのではないか。
- ・ 地域活動に意識を持ち始めた人をうまくつないでいくのは、行政の重要な役割であるが、縦割り行政の壁でうまくつながらない。行政の横のつながりをなんとかしないといけないが、連携しようとする、互いに自分のテリトリーから一步踏み出さないと交点、交わりができない。そこが難しいので、そこを少しずつコーディネートできる人が必要である。
- ・ 地域のつながり作りに防災の問題は大事なテーマの一つであり、防災の人作りが大変重要である。特に中心となる人、防災リーダーが必要である。

(地域の方は)

- ・ 地域の誰もが、自分たちのことは自分たちでやる。自分たちで何ができるかを考えるという姿勢で、生活上、町内の十分なところ、不十分なところを自ら見極めて活動していくことが理想である。
- ・ 国や地方自治体には例外はない。しかし、人々の暮らしを良くするにはグレーゾーン、例外に強い人材が必要である。

## 視点2 地域でこれまで以上に活躍が期待される人材

(どのような人材が地域に埋もれているのか)

(地域の方)

- ・ 地域にはいろいろな人たちがいる。その一人一人が主体者、主人公として活躍しないといけない。役のある人、立派な人も有力な人材であるが、そういった人だけで地域が構成されているわけではなく、地域社会の中では一部である。圧倒的 majority がそうではない人たちであり、課題解決に当たり、本当に名もない人たちがかける言葉の一つ一つが人の心を開いていくというケースを幾つか見てきている。

#### (退職された方など)

- ・ 退職された方たちは、社会貢献したいという気持ちはとてもある。この人たちがやる気になれば、大きく動けるのではないか。
- ・ 男性の社会参加、特に退職された方の地域の活動への参加が少ないことが課題である。

#### (児童生徒)

- ・ 児童生徒の地域での活動は、児童生徒にとって、自己肯定感を高め、地域を見る目につながる。また、地域の活性化につながる。

#### (企業)

- ・ 企業は地域の中に入っていく、地域の一員として交流することが大事である。

#### (専門職)

- ・ 専門職は、地域社会を横断して社会活動をしている。社会教育のみならず、福祉、労働、医療など様々な分野の専門職が、もっと地域作りに関わっていくことが大事である。

### 視点3 人材を発掘するための方策

- ・ 定年の延長により、後期高齢者にならないと地域に戻ってくるできない。それにより地域の担い手不足が広がっており、社会活動、地域活動することを保障していく、参加を促していくような仕組みが必要である。
- ・ ワーク・ライフ・バランスが、家庭と職場だけでなく、社会活動、地域活動に参加できるよう、例えば、社会活動を行うための休暇や、行うことを理由とした保育所での保育を可能とするような制度的な仕組みも望まれる。
- ・ 地域にはいろいろな人がいる。その一人一人をどう主人公に引き出すかが重要である。地域の一人一人の立つ瀬があるような議論を、積み上げていかないと、なかなか地域作りにつながっていかない。
- ・ 地域で知恵を出し合っていくには、多世代で交わり、議論していくような工夫をすることが重要である。
- ・ 皆で地域課題を解決するためには、互いの世代をより理解することが大事である。
- ・ 地域のつながり、また参加していただく方を増やそうとする際に、世代や性別といった対象となるターゲット層を絞り込み、その層にあった仕組み作りという発想が必要である。

#### (退職された方など)

- ・ 間もなく退職する世代としては、何かできるのではないかとと思っている。どのような活動ができるか研修していくとよい。
- ・ 現職の方で、間もなく退職という人たちを対象に、社会貢献の仕方について、話や研修ができる機会を作っていくとよい。
- ・ 男性の退職された方に、地域貢献について、どのようなジャンルがあるか紹

介することも一つの観点である。

- ・ 退職した人たちを有効に活用する場や機会、まとめていくような力がうまく機能していないため、仕組み作りが必要である。

#### (児童生徒)

- ・ 小学校までは地域活動をしていても、中学校からはカリキュラムの点で地域について学ぶ機会がなくなっていくので、地域から離れていく。中学生、高校生が地域に出て、地域と関わっていくには、社会活動を促していくという点で、何らかの仕組みがないといけない。地域で受け止める仕組みが必要になる。
- ・ 豊田市では、交流館(公民館)が中心となり地域を作っているという印象がある。企業も中に入り一緒に話をしている。地域の小中学生が必ず交流館の行事に参加しており、他地域からきている高校生もボランティアとして参加しており、児童生徒が地域に目を向ける機会が多い。また、町内ごとの自治区(自治会・町内会)からも児童生徒にボランティアに来てくれないかと声がかかる。ボランティア参加により児童生徒は自己肯定感、有用感が高められている取組である。また、その経験が将来、地域を見る目、地域への関心につながるとよいと考えている。

#### (企業)

- ・ 例えば、インターンシップで児童生徒が企業に来ているが、今度は受入れ企業が教育の現場に出ていくのはどうか、企業と学校の間で交流、つながりを作り、多世代で交流し、互いに学び合う関係を作るとよい。
- ・ 地域の商工会議所は、地元のことをよく知っている。地元の人材がいる。市町村がコラボすると、新しいことができるのではないか。
- ・ 市町村の職員が商工会議所と関わりを持ち、生涯学習につながるものを生み出すことができればと思う。その際、地元の方を通じて商工会議所の人とつながって活動できるようにしていくのも一つの手である。

#### (専門職)

- ・ 社会教育のみならず、福祉、労働、医療など様々な専門職が地域作りに関わり活動している。専門職がもっと地域作りに参加していくことが大事である。
- ・ 専門職やNPOは、地域社会を横断して社会活動しており、地域での活躍が期待できる。
- ・ 横につながっていくことが重要であるので、専門職が地域社会での自治や地域作りに参加する仕組みを検討してほしい。

## 視点4 人材の養成・育成の方策

#### (市町村)

- ・ 県の行う研修や、大学の行う社会教育主事講習を受けるなどし、その道の専門家を育成することで、つながりを持ち、生涯学習・社会教育の展望を持つことができ、どうつなげたらよいか先手が打てるようになる。
- ・ 社会教育主事の資格を取得し、それでおしまいというのではなく、更に積み

上げていく。

- ・ 人事異動で、市町村の職員が数年で変わってしまうことが社会教育の現場の大きな課題であるが、変わることが必ずしも悪いわけではない。田原市に視察に行ったが、そこで中心となっている人は、社会福祉、生涯学習、学校教育、労働部といったいろいろな部署を渡り、その経験を生かしてつなげている。いろいろな部署を渡ることで、多職種協働を可能にするといった人材もいる。そういった方を多職種協働研修に生かすとよい。

### (県の行う研修等)

#### <研修全般>

- ・ 良い活動を行っている実際の現場に行き、見学等を行うような研修も必要である。
- ・ 研修参加者が実際に活動していく中で課題を持って研修に参加できるとよい。研修後にフォローアップ研修を行うなど、研修の組み直しも必要かと思う。
- ・ 社会教育の研修を受けた人が地域福祉の研修も受ける、逆に地域福祉の研修を受けた人が社会教育の研修を受けるといった交差が行われ、両方学ぶと良いと思う。県の研修の中で、そういったことは可能ではないかと思った。是非研修の交流をしていただくとよい。
- ・ 生涯学習・社会教育は、自分たちや、隣近所、町内の暮らしが本当に良くなるためにやるものだが、地域の暮らしからみると、研修の中に、市民はこれをやろうというものがなく、役所のやっていることは良くわからないという印象をもつのではないか。研修目的をはっきりさせる必要がある。
- ・ 県で講座を受けたが、それだけでは、地域でつながることは難しかった。地域でグループを作って活動を続けるうちに、地域でつながることができた。
- ・ 養成すればすぐ活用できるとか、育成すればすぐ活躍してくれるというものではなく、地域でそれまでの積み重ねがあってこそ、それが生かされる。
- ・ 今は人材養成においては、スーパービジョンや、コンサルテーションが非常に大事である。市町村は、社会教育で地域をつなげているような人たちの現場に行って一緒に考えることができる人材を、県は、他の市町村の情報をもちながら、一緒に考え、他での事例を紹介するなど、そういった人を育成できるとよい。
- ・ 専門職のような人を期間限定で配置すると良いと思う。専門的にやっている人を、更にスーパービジョンや、コンサルテーションするような人材がいて、いろいろなところを回るといことが考えられる。

#### <市町村向けの研修>

- ・ 市町村の職員に対し行われる研修では、生涯学習・社会教育とは何か、どのような役割があるかが伝わるような資料提供が必要である。
- ・ 南医療生協の活動や、そこでの地域社会ドックは非常に興味深い。そういった地域学習というのは、社会教育ですっと行ってきたことなのだが、それをコーディネートできる社会教育職員が市町村にどれだけいるかということ、非常に心もとない。地域学習をコーディネートできる人材や、市町村職員をコミュ

ニティワーカーとして育成するような研修を是非やってみていただきたい。

#### ＜社会教育士の資格取得促進＞

- ・ 文部科学省で、社会教育主事の養成が見直され、これから資格を取る人には、社会教育士の称号が付与される。その人たちだけではなく、既に社会教育主事の資格を持っている方が、社会教育士という称号を使えるようになると、その称号でいろいろな形で地域に入っていけるだろうと思う。
- ・ 社会教育主事の養成の見直しによる新しい科目「生涯学習支援論」、「社会教育経営論」は、現代的な生涯学習に有用で、地域社会経営に関わってくる科目であり、それを地域の人、いま社会教育主事の資格を持っている人に受けてもらえるような支援を是非県としていただけないか、これがフォローアップになると思う。

#### ＜プログラム開発・活用＞

- ・ 県の研修に参加できる人は少ない。県で行うだけでなく、県がプログラムを作り、市町村が自前で人材育成できるようなパッケージとして普及できないかと思う。
- ・ 地域作りについては、社会教育だけで奮闘しても駄目であり、いろいろなまち作り、地域作りの部署や、社会福祉、医療、産業、商工会議所も含めて連携することで可能となるため、多職種協働研修が必要となる。しかし、ノウハウは地域にないので、それについても県でプログラムを開発し、市町村にやってみてはどうかという提案をしていただきたい。
- ・ 管理職の社会教育への理解が非常に心もとないところがある。管理職に社会教育への理解がどれくらいあるかということが、市町村の現場を支えると思うので、市町村の管理職研修にも、県でプログラムの開発をし、提案をしていただきたいと思う。

### 視点5 行政と人材とが連携するためのネットワーク作りの方策

- ・ 地域のために動こうという方から、予算的支援や、活動場所の保障はないかなど要望を受けている。行政は、支援できるような予算的な裏づけや組織作りをすべきである。
- ・ お金がなければ、必ずしも人が動かないわけではない。手間も時間もかかるが、それを惜しんではいけない。
- ・ 「それは駄目」でなく、「こんな手段がある、こんな支援ができる、こんなつながりはどうか」というように、柔軟に対応することも行政の役割である。
- ・ 行政が人と人をつなぎ、きっかけを作ることにより、仲間が増えていくことがある。それによりネットワークが強固なものになっていく。
- ・ つないでよいと思われる人や団体をこまめに結び付けていく役割が重要であり、ここに行政の役割がある。
- ・ 行政は、人材の発掘、活動している人を見つけ、つなぐ役割、つなぐきっかけを作る仕事にシフトしていけばよい。それができれば、随分変わるのではな

いか。

- 行政でやれる範囲は限られるが、企画したことを、どう広報していくかが課題である。
- 民間だけでは活動の限界がある。行政の隙間で、支援されていないところに手をさしのべている活動が行政に伝わり、政策化につながる仕組みが必要である。
- 民間と行政が一緒になって地域を作っていく仕組みが必要である
- 行政が柔軟に地域活動に役立てるよう動けるかというのが重要なポイントである。
- 市町村行政では、現場に行き、この人とこの人をつなげていこうかという努力が必要である。
- 市民の「何とかしよう」という積極的なアイデア、御意見に応えるようコーディネートする、先手を打っていくのが行政の役割であろう。
- 社会教育委員は、つなげていく役割を持っていると自覚し、活動している。市町村は、地域のつながりを作ろうとすると、社会教育委員をもっと活用していくとよい。

## 視点6 人材が広く活躍するためのネットワーク作りの方策

- 現場で何かを感じ、それをどうするかを考えることは、一人では難しいと思う。やれる方がやれることをお互いに協力しながらやっていく必要がある。老若男女、それぞれが協力できるような社会となっていくとよい。
- 形式化された方法論はまだない。地域と行政が情報交換し、良い仕組みを作り上げていくのだが、ある地域で取り組まれていることが、その地域には合うが他の地域には合わないことがあることに留意する。
- 年齢層を超えた交わりは難しい。いろいろな世代、背景をもつ人たちをつなぐ上で、共通のインターフェース、フレームを考え、ニーズのマッチングをしていくと解決に近づくのではないか。
- 人と人をつなぐことができる人をどう創り出すか考えないといけない。
- 地域社会に緩いつながりを作ろうという場合は、地域に居場所を作り、居場所のところに専門職あるいは住民の方でもある程度そういった指向性を持った人を配置し、来た人たちをつないでいくような仕組みを作っていくとよい。
- 困難を抱える人に光をあてようとする、それが行政や住民を横につなげる機会となる。
- 困難を抱える人を地域につなぐ場合は、社会福祉の分野からみると、社会福祉協議会の方や民生委員など福祉分野の人を活用するとよい。
- 南医療生協のまち作りは、地域のつながりと困難を抱える人を地域につなぐことの二つが分かれているのではなく、連続している。地域ぐるみで活動し、困難を抱える人もその中に入っていく。必ずしも二つの側面というとらえ方だけではなく、いかにうまく両側面がつながっていくかである。

- 専門職員のいる社会教育施設を活用し、地域課題解決に結びつける人が増えなければならない。市民に活用していただき、交流が生まれ、次のステップにつながるよう安城市図書館では、会話、飲食可としている。
- 民生委員や子供育成の組織など、地域にいろいろな組織があるが、それをつなげるネットワーク、協議会がまだできていないので必要だろう。それは代表者ばかり集め、会議して終わりでは駄目で実際に活用しているボランティアや様々な人たちをつなぐことが必要である。
- グループでは、それぞれの人にやれることだけ活動してもらい、そこで年齢の高い方を起点として、つながりを作り、活動が広がったということがあった。